
yesterday one more

村山ツグト

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

y e s t e r d a y o n e m o r e

【Nコード】

N 6 2 4 1 C

【作者名】

村山ツグト

【あらすじ】

憧れの先輩を追って教師という職業に就くことにした僕には、いつも一緒にそして支えてくれた女の子がいた。告白という大儀の元に僕はかつて挫折したそれをしようとする。

屋上から見る風景は、三年経った今でも変わることなくその美しさを保っていた。

街並みが小さく見える。人も、木も、車も、何もかもが小さく見える。

胸ポケットから煙草を一本取り出して火を点ける。

日が傾いてきた。

時計を見ると、五時を回っている。

生徒たちの大半は下校し、残っている者はクラブ活動に熱心だ。

優しい風が髪を揺らす。……気持ちがいい。

啜える煙草を指に挟み、煙を吐き出す。

「何も変わってないな」

一つの記憶が脳裏を掠める。

悔やんでも悔やみきれない過去。

目を閉じれば、自分はいつの間にか赤々と燃える夕日の下に立っていた。

「どうしたの？ あ、遅れたことを怒っているのかな」

両手指を合わせにぱつと笑う笑顔は、当時のままの記憶の再現。

「いえ、ちょっと考え事を。それより、すみません。突然呼び出したりして」

心臓がバクバク高鳴る。口から出す一言一言に重みを感じるのは、十八年生きた中で初めてかも知れない。

「ううん。それより話って何かな？」

おっとりとした口調は優しい音色で、僕の緊張をわずかに和らげてくれる。

「ご卒業おめでとうございます！」

勢い良く頭を下げる僕に、先輩は少し動揺したらしく、言葉が数秒

遅れて「あは」と笑う。

「ありがとう。ちょっと淋しいね、君とこうして話できなくなっちゃうんだね」

先輩は淋しそうな顔をして俯く。

「あ、あの・・・」

声を出してはみたが、緊張で次の言葉が出ない。

「あ、と、あの」

言いたいことが、伝えたいことが出てこない。

準備はしてきた。覚悟もしてきた。

想定できる最悪の結果に拳も固めて、折れない心を作ってきた。

それでも、伝えたい言葉の最初の一言も出てこない。

「・・・まどろっこしい。」

自分の情けなさに腹が立つ。感情を抑えることが出来ず、自分の不甲斐無さに目が霞んできた。

「あ、そうだ。知ってる？　ここから見える夕日の本当の姿」

先輩の突然の言葉に返すことが出来ず黙ったままになってしまった。

先輩は僕が不思議に感じていると思ったのか、少し残念そうな顔をして話を続けた。

「ここから見える夕日はね、実は紅い色の物じゃないの。本当はね、紫色をしているの」

「紫？」

先輩は頷く。

「そう。でもね、その色は一般的には見ることの出来ないものの。本当に必要な人にだけ見える、いわば『支え人』みたいなものの」

『支え人』

初めて聞く言葉に疑問を持つ。

「今は見えていないってことは、今の君には必要がないんだよ。それが見える時は、君が再び困ってここにいる時。もしくは、何かの覚悟をして勇気を欲している時なの」

「・・・」

先輩が何を言いたいのかわからないが、夕日に二つ姿があるのは分かった。

先輩の話は終了したのか、夕日をジッと見ている。
気まずい雰囲気の流れている。

タイミングを失い、掛ける言葉を必死に探す。けど、何も思いつかなかった。

沈黙。

苦く、辛く厭らしい時間の中、先輩がこの沈黙を破った。

「今日はありがとう。君みたいな後輩がいて、私は幸せだよ」

俯いていた顔は、笑顔に変わり、先輩の背後に真赤な夕日が先輩の顔を照らし隠す。

手で遮る。先輩の口が動き何かを伝えようとしていたが、確認できなかった。

「じゃ、さようなら。元気でね！」

駆け足で去る先輩の背中を見ながら、僕はこの日初めて涙を流した。色々な感情が心を巡り、ぐちゃぐちゃにかき回す。

大好きな光景、大好きな真紅の夕日が、この日ばかりは大嫌いになった。

ガチャ

扉が開き足音が近づいてくる。

「やっぱりここにいた。未練たらたら」

高揚した声がからかってくる。

「だから、結果が伴わないんだよ」

「亜矢に言われたくないよ」

「君に言われたくもないよ」

ぷっ、二人で笑い合う。

「で、覚悟は決まったの？」

「五分五分」

亜矢は僕の理解者だ。

僕がここに研修を志願した時も、何も言わずに付き添ってくれた。

「曖昧だね。ま、君を好きになる人間なんてこの世に一桁もいるとは思えないけどね」

「君を好きになる人もまた稀だな」

「ふ、私はこれでも一日に二人以上に告白されるのさ」

「それは初耳。メモっておく必要がある」

「そうしろ」

腕時計を見る。時間が近づいている。

「もうすぐだね」

「もうすぐだな」

「何年ぶりなの？」

「五年・・・かな。先輩と別れた後は会ってない。手紙はたまに来るけど」

「大丈夫？」

「五分五分」

バシッ

背中を思い切り叩かれた。さすが元体育系なだけに相当な衝撃だ。

「・・・ばれよ」

背中を擦りながら見ると、亜矢の目に僕のと違う雫が浮かんでいた。

「男を見せなさいよ。でないと、私が惨めだ」

声をあげないのは彼女の意地だろう。

「死んだら骨は私が拾ってあげるから、頑張って死んで来い」

ボタンと戸を閉め退場する亜矢と入れ替わりに懐かしい香がした。

足音が近づいてくる。

煙草を捨てて振り返る。

「久しぶりだね」

少し大人びた綺麗な女性が、昔と変わらない笑顔でいた。

憧れの人の背後には、紫色の夕日が僕を応援してくれていた。

（後書き）

恋愛をテーマに考えた「こういうのもあるかな」という作品です。これは私語ですが、こういう環境の恋愛をしたいなと思って願って書いた部分もあります。

いくつか書いた中でも好きな作品の一つです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6241c/>

yesterday one more

2011年1月15日20時46分発行